

2019年10月～2020年9月

成果報告レポート

コロナ禍で取り組んだ
子ども向けの環境体験活動の実践

Green Gift 地球元気プログラム

日本国内の子どもたちとその家族を対象に、地域の環境NPO、環境パートナーシップオフィス(EPO)、東京海上日動火災保険株式会社、日本NPOセンターの四者が協力して全国で市民参加型の環境保護イベントを開催する取り組みです。

東京海上日動が「お客様とともに環境保護活動を行うこと」をコンセプトに実施している「Green Gift」プロジェクトの一環として、日本NPOセンターが東京海上日動から寄付を受け、協働事業として2013年から開催しています。



つなげる、ひろがる

地球元気プログラムの目的「3つのギフト」

地球元気プログラムは全国の子どもたちとその家族、プログラムに関わるステークホルダーに3つの価値を届け、各地域で持続可能な環境が次世代に提供されることを目指しています。



次世代へのギフト

子ども達が環境について考え、行動するきっかけをつくります



ステークホルダーへのギフト

多様なステークホルダーで作る協働取り組みのモデルをつくります



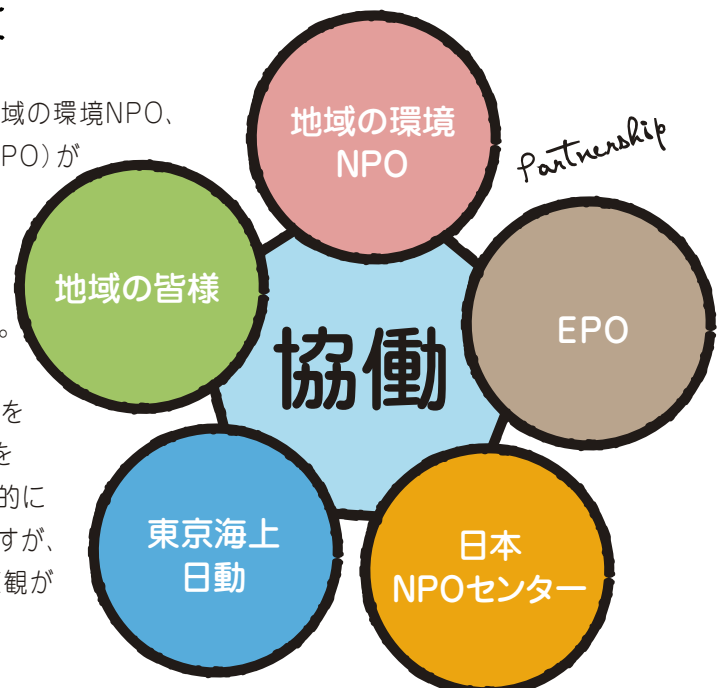
地域へのギフト

持続可能な環境を守る地域の担い手を育てます

協働ですすめるプログラム

各地域で開催される市民参加型の環境保護イベントは、地域の環境NPO、東京海上日動の部・支店、環境パートナーシップオフィス(EPO)がそれぞれの特徴を生かして企画・運営しています。

環境NPOは地域の環境課題を踏まえ、体験型のプログラムを企画、東京海上日動の部・支店は代理店・顧客などのネットワークを通じた地域への広報活動を行います。協働取組のコーディネーターである環境パートナーシップオフィスは、環境NPOと東京海上日動の両者が対話し互いを理解しながら主体的に取り組むことができるようサポートを行います。異なる考え方・価値観を持つ者同士が共通の目的に向かい取り組むことは、時に考え方の相違や葛藤を生みますが、結果として新しい価値を社会に提案する、それぞれの価値観がアップデートされていくことに繋がっていきます。



プログラム実施地域・実施団体

プログラムは全国21地域で開催しています。開催地域は、東京海上日動 部店・支店の応募で決まり、自然環境の保護活動、環境体験活動に取り組む民間の市民活動団体(NPOなど)が実施団体として選ばれ、3年間活動を実施しています。

各地域の取り組みは森林、里山、河川、海などを活動場所として、それぞれの環境課題の解決を目指した内容になっています。

2015年国連サミットで採択された持続可能な開発のための2030アジェンダが掲げる持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)の目標に照らせば、プログラム全体で「4.質の高い教育をみんなに」「17.パートナーシップで目標を達成しよう」を目指し、各地域の取り組みもSDGsの目標に通じる内容になっています。

4 質の高い教育を
みんなに



17 パートナーシップで
目標を達成しよう





SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

2015年9月、「国連持続可能な開発サミット」で「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。このアジェンダは17の目標(ゴール)と169の指標(ターゲット)で構成された行動計画「持続可能な開発目標(SDGs)」を掲げています。





新型コロナウイルス感染拡大への対応



2020年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、プログラム全体、各地域で様々な対応に追われました。ここでは、プログラム全体の対応の経緯と取組内容をご紹介します。

基本方針

感染拡大、団体の運営状況などの違いを考慮した上で、以下を基本的な姿勢としました

- ・ 参加者、プログラム関係者の安心・安全を第一とする
- ・ 可能な範囲で環境保護イベントの継続に向けた検討を行い
イベント実施の際には感染防止対策を徹底する
- ・ 地域の状況、関係者の意向を踏まえて無理のない運営を行う

プログラム関係者との意見交換

2020年4月には6月までのイベント延期・中止したことを受け、5月にプログラム関係者と意見交換を行いました。各地の環境NPOが活動の縮小・休止状態であることが共有され、40%がイベント実施希望、20%がイベント以外でできることに取り組みたい意向があることがわかりました。

時期

プログラム全体の対応

2月	新型コロナウイルス対応方針第1報 発信 (3月末までイベント中止)
3月	新型コロナウイルス対応方針第2報 発信 (6月末までイベント中止)
5月	プログラム関係者のオンライン意見交換会
7月	ガイドライン策定・プログラム再開

7月のガイドライン策定とプログラム再開

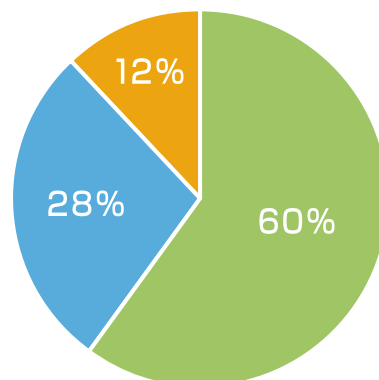
各地域の現状と意向を踏まえて、7月にプログラムを再開しました。このときには東京海上日動、環境パートナーシップオフィスと協議を行い、再開後のプログラム内容を決めました。東京海上日動が設定する地域ごとの基準に合わせてイベント開催の可否を判断、イベント開催が困難な地域は動画制作などイベント以外の取り組みが実施できるようにしました。

イベント開催基準の設定

- ・ 実施内容としてオンライン開催・ツール開発を追加
- ・ 感染拡大予防策を記載した運営マニュアルの配布
- ・ 新型コロナウイルス対応保険の加入
- ・ 非接触体温計の貸与（東京海上日動からの提供）
- ・ 感染拡大対策にかかる経費の一部補助

再開後の実施結果

再開からの実施期間は3ヶ月でしたが、12地域の環境NPOが17回のイベントを開催しました。感染拡大の影響でイベントが開催できなかった地域は、7団体が活動フィールドを紹介する動画、生き物観察に使えるガイドブック、自宅で楽しめる体験キットなどのツールを開発しました。感染拡大の広がりを受け止め方は地域差があり、開催判断は各地域で苦慮しました。2年目では感染拡大は継続することを前提に柔軟に計画できるようプログラム設計を修正することになりました。



■ イベント実施

12地域 17回

■ 代替事業

7地域 7種類
動画制作、情報サイト構築、
ガイドブック制作など

■ その他



次世代へのギフト

近畿エリア

自然の素材でものづくりを楽しむ

自然材料を使ったものづくりの面白さと遊ぶ楽しさを体験してもらいたいと企画しました。場所は大阪府民の森の一つ「むろいけ園地」、プログラムは竹を使った水鉄砲作りと水遊び。当日、まずは材料である竹のこと、ノコギリの使い方を伝えました。そのあとは制作です。子どもたちは大人の手を借りつつ、水を入れてちゃんと出るかななどを自分たちで確かめながら作りあげます。完成後は、みんなで水鉄砲を使って楽しく遊びました。

今回の企画は、感染拡大後初めてのイベントだったため、運営者同士で密にやりとりして、消毒液・体温計・フェイスシールド、密を回避するためにテントを複数用意しました。これまでと違う準備に苦労はありましたが、参加した子どもたちが楽しんでおり、今度作りたいもののアイデアももらったので、今後も身近な自然でできる小さなサバイバル体験を行っていきます。

POINT

- ・刃物を使ってものを作るという小さなサバイバル体験ができた
- ・感染拡大防止のためにプログラム関係者で密な情報交換を行えた
- ・子どもたちから次につくりたいもの提案がもられた



作ってみよう 竹の水てっぽう



団体名 特定非営利活動法人 日本パークレンジャー協会

子どもたちの感想

- ・竹っていがいと固いということを知りました。
- ・たのしかったし、たけでみずてっぽうをつくれるなんてしらなかった。
- ・自分で作るのが良かった。



大人たちの感想

- ・イベントの中止が多い中、感染防止をしながらの実施でありがたかった。
- ・都会で子育てをしているとなかなかできない体験なのでまた参加したい。

事例紹介 屋外の環境体験活動



ステーキホルダーへのギフト

関東エリア

「里山」を遊びながら楽しむ

栃木県市貝町田野辺地区の地元農家が整備している里山で、「森の宝探し／落ち葉集め」、「木工クラフト／竹のプランターづくり」、「野菜の収穫」を行いました。

まずは里山をフィールドにお宝や落ち葉集め、これは班対抗で盛り上がりしました。木工クラフトとプランター作りは一転して子どもたちは集中して思い思いの作品を作っていました。最後は、実際に野菜を作っている農家の人の話を聞いた後で収穫作業。里山の自然にふれ、お話を聞いた後だったので、収穫した野菜への子どもたちの目がいつもと違っていました。

今回の企画、本来は身近な自然と食のつながりを知ってもらいたかったのですが、感染拡大防止の観点から飲食不可になってしまいました。そこで、地域の多様なステーキホルダーの協力を得て、遊んで里山を知る、農家のお話を聞く、収穫作業を体験するという内容に変更しました。今回で楽しく知ってもらえることはできたので、今後は楽しいで終わらない、より自然と自分たちの生活のつながりを知ることができるプログラムを行っていきます。

POINT

- ・班を作り対戦形式にすることで里山の自然を楽しく体験できた
- ・有機農業の農家の協力で野菜のお話と収穫体験を実施できた
- ・企業の子ども向けイベント開催で移住者と地域住民が繋がった



わたねの森の、楽しい里山とおいしい畑でリフレッシュ



団体名 特定非営利活動法人 トチギ環境未来基地

子どもたちの感想

- ・宝探しでキラキラの宝を見つけられてうれしかった。
- ・竹のプランターに花をいれるのが楽しかった。



大人たちの感想

- ・子どもたちが外で遊ぶことが好きなんだと改めて感じた。



ステークホルダーへのギフト

近畿エリア

いろんな生き物と出会うためのガイドブック作り

奈良県吉野郡川上村を水源に和歌山県を横断して和歌山湾に流れ込むのが吉野川・紀の川です。私たちは、川上村の「森と水の源流館」運営を行いつつ、源流を通して自然と人の関わりを考え一人ひとりが答えを見つけていく「源流学」に取り組んでいます。

開始当初、吉野川・紀の川の下流、河口付近での自然観察イベントを予定していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大で中止、次年度につなげるために、吉野川・紀の川流域に生息する代表的な昆虫類・魚類・外来種を紹介するガイドブック制作に切り替えました。制作では和歌山県立自然博物館に協力を依頼。お互いの知見を持ち寄り、生き物の紹介はもちろん、観察のための服装や持ち物、注意事項や心得もまとめました。

今年度のイベント開催は叶いませんでしたが、流域ごとに色々な生き物がいることを伝えられるツールを作ることができました。

今後はこのガイドブックを活用した観察会を行っていきます。

POINT

- ・全長 136kmの奈良県・和歌山県を横断する流域の生き物を見える化した
- ・流域の生き物観察に必要な服装、持ち物などを明記し、フィールドへ出掛けたいくなる仕掛けづくりをした
- ・ステークホルダーと協力して多様な視点で流域の多様な生き物を紹介できた



吉野川・紀の川生きものガイドブック



団体名 公益財団法人吉野川紀の川源流物語



団体の感想

掲載対象が昆虫から爬虫類までと範囲が広いにもかかわらず、掲載種数が少なかったため、掲載種の選定については身近な生きものを見つけられるツールにできるような心掛けた。ステークホルダーの和歌山県立自然博物館と紀の川流域の生物相について情報共有ができ、完成したガイドブックを活用した観察会の手法を制作段階で話し合うことができた。

事例紹介 ツール開発



地域へのギフト

中国エリア

子どもとオトナで取組む動画づくり

日本の「名勝」に指定されている峡谷、広島県三段峡を活動フィールドにしています。開始当初はワークショップ、子どもたちの保護者へのヒアリング調査でプログラムの方向性をステークホルダーで共有しました。屋外の体験型プログラムを計画しましたが、残念ながら新型コロナウイルスの感染拡大で中止、年度途中でステイホームの子どもたちが楽しんで次年度に三段峡にいきたいという動画制作に切り替えました。

動画制作は、地元大学の学生を講師に招き、シナリオ作り・撮影・編集を学び、フィールドワーカー、地元の子ども・保護者などの協力を得て撮影会を開催。複数のスタッフがそれぞれの視点・切り口で三段峡を紹介する動画を制作しました。

三段峡の自然を直接体験する機会ができなかったのは残念でしたが、制作した動画、学んだ動画作成技術を次年度の活動に活かしていきます。

POINT

- ・動画制作の過程で子どもたちに三段峡の雰囲気を知ってもらうことができた
- ・調査と撮影・編集をステークホルダーで一緒に取り組む形を作ることができた
- ・プロジェクトメンバーが動画制作技術を学ぶことができた



Green Gift

さんけんWEB自然塾



団体名 特別認定特定非営利活動法人

三段峡-太田川流域研究会



大人たちの感想

- ・自分たちの地域の川が、貴重なものだということがわかりました。
- ・さんけん自然塾の取り組みの意義が理解できました。
- ・生態系から学べる自然環境の大切さ、冒険する事で子どものチャレンジ精神が養われるというメッセージが伝わってきました。我が子も参加させたい。

1年をふりかえって

今回は、プログラムの全国事務局である日本NPOセンターとプログラム全体を支援する東京海上日動の担当で、この1年の取り組みを振り返りました。

2019年度は新たな3年間の初年度でした。プログラムに対してどんな思いを持っていましたか？



吉田

子どもたちに身近な自然環境体験活動を提供するという目的を変えず、各地域の皆さんと一緒に取り組む形ができてきたので、次の3年間では子どもたちがプログラムづくりに関わること、地域の環境活動に関わる人、組織がより広がることを意識していました。



高津戸

私たちも各地域の社員もだいぶ慣れてきました。地球元気プログラムは、年1回報告会があり、普段は知ることができない地域の様子や団体の皆さんの考えを知ることができ、とても勉強になっています。

2020年2月から新型コロナウイルスの影響を大きく受けることになりました。どんなことに気をつけて対応しましたか？

吉田： 3月には団体と参加者の安心安全を考え、6月末までのイベントの延期・中止を決めました。その後はEPOの協力で各地域の状況を聞き取り、「今の状況で出来ることは何か」をNPO、EPO、東京海上日動の皆さんと話し合いました。

高津戸： 思い返すと、誰も経験したことがなく、これからどうなるかが誰もわからない状況でした。各地域の皆さんのお話をお聞きできたので、そのニーズに応じて私たちは、社内の様々な部署の担当者に相談や調整に取り組みました。

吉田： 東京海上日動の皆さんも同じ姿勢で考えてくださったのがとても難かったです。各地域では感染予防に必要な消毒液、確保が難しくなっていた検温計を提供いただきましたよね。地域の感染拡大の状況や受け止め方も様々だったので、関係者で話し合い、答えを出していくプロセスを作ること、そしてみんなで考え続けることが重要だと考えていました。

高津戸： 意見交換の場では各地の団体の皆さんも大変な様子も伺っていたので、再開後に感染拡大防止の準備や、動画の制作などの新たな挑戦をしてくださったのが私たちとしてもうれしかったです。

7月から再開したプログラムで印象に残っている取り組みはありますか？

今回初めて挑戦いただいたNPOの皆さんも多かったと思いますが、どの取り組みもユニークでした。私は、千葉県谷津干潟自然観察センターが制作されたホンピノスガイの動画が特に印象に残っています。子どもだけではなく大人が見ても面白く、ホンピノスガイが食べたくならず、次のアクションにつながるコンテンツだと感じました。



佐々



藤丸

私は、大阪府の日本パークレンジャー協会が制作された夜の動物たちの動画です。暗闇に光る動物の目など、普通はなかなか目にする機会がないもので、これも子どもも大人も楽しめる内容だったと思います。

再開後に見えてきた課題はありましたか？

吉田： イベント開催されたNPOは感染拡大への不安と対応で苦労されていました。動画やガイドブックなどの制作も体験活動で提供できていた五感に訴えかけられない難しさがあったと聞いています。

最後に、withコロナの社会になりつつある中で、今後地球元気プログラムで取り組みたいこと、期待することを教えてください

吉田： 地域のNPOと地域の部店・支店がその地域で一緒に取り組むという形は、withコロナの社会にあっているのではないかと考えています。少人数向けのプログラムや家族単位の募集、オンラインの体験活動など、今の状況に適應するための工夫が生まれています。従来の体験活動の場も守りつつ、環境体験活動でできることが増えていくと良いと期待しています。

高津戸： 環境体験プログラムとして得意なことを続けつつ、状況に適應することが大切だと考えています。変異株の発生、ワクチン接種の課題もありますが、まずは安全安心を第一に知恵と工夫を各地域で共有しながら実施いただけるといいのではないかと感じています。



子どもたちが環境について考え、
行動を変えるきっかけをつくります。



多くの子どもたちに満足してもらえる
プログラムを実施しました



参加する子どもは前年の**84%**減の204名でしたが、
プログラムの参加者の**99%**が
「大満足」「満足」と答えました。
(去年は87%、一昨年は80%)



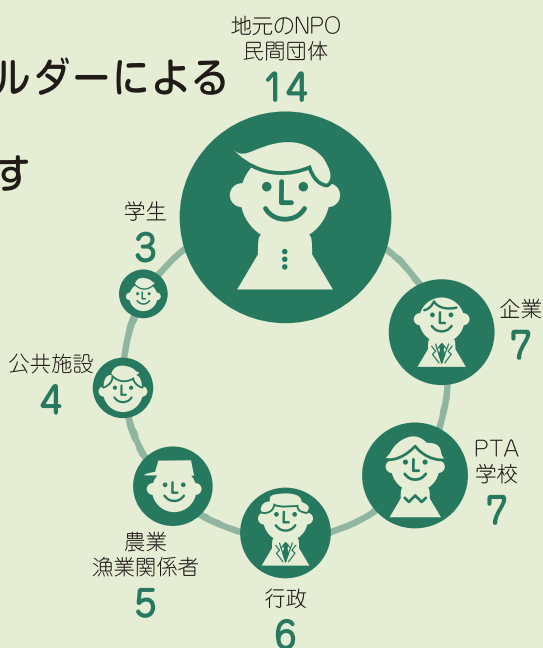
多様なステークホルダーによる
協働取組みの
モデルをつくります



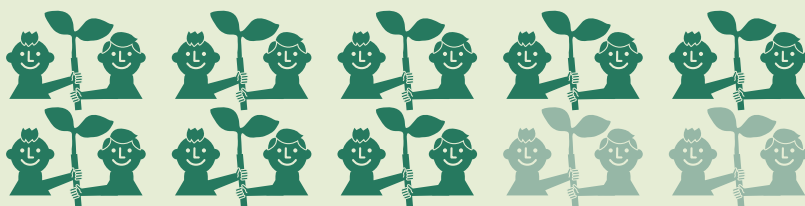
地域ごとにたくさんのステークホルダーとの
協働が実現しました

46のステークホルダーの協力により、
プログラムが実施されました。

新型コロナの影響で関わりは昨年のおおよそ**半分**でした。



持続可能な環境をまもる
地域の担い手を育てます



多くの人たちがプログラムへの
参加をきっかけに、
環境保護活動を広げて
いきたいと感じています



地球元気プログラムへの参加をきっかけに、**78%**の人たちが
今回は**「家族や友人を誘いたい」**と答えました。(去年は78%一昨年は84%)

Green Gift 地球元気プログラム全国事務局
認定特定非営利活動法人日本NPOセンター

〒100-0004 東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル245
TEL: 03-3510-0855 FAX: 03-3510-0856
E-mail: greengift@jnpoc.ne.jp
HP: http://www.jnpoc.ne.jp/



作成：2021年10月